

## 巻頭言

# “素敵な後輩”

大阪大学大学院医学系研究科  
内分泌・代謝内科学  
下村伊一郎

今年も肥満／糖尿病にフィーチャーしたキーストンシンポジウムに行ってきた。丸1週間の渡航になり、前後の予定は大変なものになるが、やっぱり行ってよかったと思う。

最近、論文を読む余裕がなかなか無く、キーストンでは、これから向こう1～2年の間に論文として出てくる、また論文化を目指している仕事を見聞きすることができる。また、論文の活字を見るだけではなかなか伝わらない、やっている当人達の思いを生で身振り手振りそして肉声で聴いていると、こちらの知識も深いところまで入ってくる気がする。

さらに私がキーストンへ行く楽しみは、古くからの海外の友人達に多く会えること、そしてとても楽しいなことは、日頃ゆっくり時間をともに過ごせない日本の他大学・他施設の同じ領域の先生方や後輩達とたくさん食事をしたり話をしたりすることができることだ。

こういった時間は、普段ばたばたしている私にとって桃源郷のような時間である。

私にとって「人生、何が楽しみか？」の問いに答えはいくつかあるが、メンタリティー的には「立派だな～」と感じられる人々に会えることが一番の喜びだ。キーストンに出かける大きな理由もそこにある。そんな立派な人々に会えた時、遠くを焦がれる(あくがれ:あこがれの)気持ちになり、自分も少しでも近づくことができたらという気持ちになる。それは年上でも、同世代でも、そして年下でも変わらない。最近、特に自分より年下の人であれば、嬉しい気持ちになり自然と微笑んでしまう。

私が、松澤佑次先生のもとで肥満の研究を始めて以来、この領域は世界的にすごい勢いで進んできた。そこに日本の研究者達が果たしてきた貢献は大変大きい。キーストンを始め海外のいろいろな学会に行っても、肥満に関わる研究のトピックが常に皆の注目を集め、熱気の的であったように思う。それが、ここ3～4年、何となくその熱気が薄まったように感じている。ただ私が感じているだけなのかと思ったら、日本の同じ世代の先生達、海外の友人達にも同じように感じている人が多い。領域の沈滞期なのか、研究費あるいは人の有り様の変化から世界的に多くの研究領域で見られることなのか、はっきりとしない。

でも、確実に必要なのは領域の活気だと思う。領域の活気には、領域そのものの面白さに加え、その中で新たなものを作り上げていく力と思いと根性が要る。私も、少しでも貢献したいと思うが、若い人たちにもそのことをとても期待してしまう。だから自分より年下の立派な人に出会うと微笑んでしまうのだと思う。

これからの肥満研究を担う若い人たち、どうか頑張っていてほしい。私達が経験させてもらったあのような熱気は、きっと貴君貴女の「人生のとても大きな楽しみ」になる。

そんな“素敵な後輩”達に肥満学会やいろいろなところで会うことを楽しみにして、エールを送っていききたい。